

## カナダ先住民への同化教育：寄宿学校制度\*

浜 由美子\*\*

(1996年5月7日受理)

### 1 はじめに

19世紀半ばよりカナダで先住民に対する西欧文化への同化政策 (assimilation policy) が強力に推し進められるようになった背景として、次のようなことが考えられる。まず、乱獲により毛皮交易が衰退し始め、同時に、アメリカとの戦いの脅威がなくなったこと。さらに、ナポレオン戦争の終焉や大陸横断鉄道の開通などにより、西欧からの入植者が急増したことにより、今まで同胞と考えられていた先住民族は、文化など持たない移植への妨げとなる“野蛮人”であり、教化、啓蒙する必要があるとみなされたのである。同化政策の根底にあるのは西欧文明の優越性で、入植して来た西欧人は彼らの文化が先住民の文化よりはるかに進んだ優れたものであることをいささかも疑わなかった。この誤った概念のもとに政府は先住民族が生き残れる唯一の道は、その子供じみた考え方や未開の生活様式を捨て、主流である西欧的社会秩序の中に組み込まれることであり、それが彼等にとって最も最善の方策であるという確信を抱くようになった。これを成し遂げるための最も効果的な方法は若者への教育を通してであると考え、政府は未開の異教徒の改宗・教化を目指すローマ・カトリック、聖公会 (Anglican)、長老会 (Presbyterian)、メソジスト (Methodist) などキリスト教団と結託し、同化教育を1830年頃から1970年頃まで一貫して施行した。先住民族の文化が数百年にわたる西欧社会の侵入にも存続しえたほど活力に満ちた精神的伝統を継承したものであったにもかかわらず、文明生活に合わないとして否定し、切り捨てようとしたわけである。第一国家民族 (First Nations peoples)<sup>(1)</sup> の固有の文化や伝統を根こそぎにしようとした同化教育、特に教団により1880年頃から1970年代にわたって実施された改宗・教化を目標とした寄宿学校教育は、さまざまな直接的影響を先住民族に与え、現在抱えている問題の多くの根はそこにあると言ってもよいほどの間接的影響を及ぼしている。従って、この寄宿学校制度の実態を明らかにすることは現在先住民族が抱える問題や今後の先住民教育の展望を考える上で重要なことであると思われた。

このように考え研究を始めたわけだが、勤務校である十文字学園女子短期大学の海外研修員制度により1996年春にバンクーバーに来てみると、3月25、26日に「寄宿学校に関する首長特別会議」(Chiefs Special Assembly on Residential Schools) が開催されたばかりであった。その資料や最新の文献により、「癒しの輪」(Healing Circle)、すなわち、寄宿学校を経験した

\*Residential Schools: The Canadian Education Policy to Assimilate Native Indians

\*\*Yumiko HAMA, the Course of English Language & Literature (文学科英語英文専攻)

人々が集まってその体験を語り合うことにより癒しの道を進む助けとなる集会在、各所で開かれていたり、当時学生たちの受けた身体的、性的虐待に対する訴訟が起こされていたり、その補償運動が始まっていたりと、現在まだ進行中の問題であることが分かった。

そこで、本稿では、寄宿学校がどういうものであったのか、その影響を考える際に、主として先住民族自らの視点を通して検証することに焦点を絞る。当初は宣教師など教育に実際に携わった者の視点からも考察するつもりであったが、聖職者が起訴され、補償問題が討議される中、教会側から謝罪文は出されはしたものの、現在のところその見解は曖昧なので、今後の課題としてここでは扱わないことにする。

まず第2節で、教団による寄宿学校経営がどのようにして行なわれるようになったのか、また、それを可能にした政府の先住民教育政策がどのように合法化され、変化していったのか、その歴史的経緯を検討する。第3節では先住民社会での伝統的教育方法がどのようなものであったか、第4節で、寄宿学校での教育が伝統的教育法と比較してどうであったかその内容、および、先住民の視点から見た寄宿学校制度とその影響を、Maria Campbellの*Halfbreed*、Basil H. Johnstonの*Indian School Days*、Isabelle Knockwoodの*Out of the Depths*を主として取り上げ考察する。最後に、寄宿学校に関する最近の動向、先住民教育の現状と問題点に関して簡単に触れたい。

## 2 インディアンへの同化教育政策の変遷

宣教師による改宗・教化教育にどのように政府が係わり、同化教育政策が合法化されていったのか、そして、いかにして先住民が一世以上にわたる政府の同化教育政策から抜け出し、1970年代から子供の教育をいくぶんかでも管理できるようになったのか、その経緯を理解するには、過去4世紀にわたっての先住民とヨーロッパからの入植者や政府との歴史的関係を理解する必要があるだろう。

17世紀初期にカナダに西欧人が到着すると、人種的優越感にたつ彼等は先住民に対して傲慢な態度をとるものが多く、ほとんどすぐに摩擦が起こった。しかし、先住民と接触した西欧人には大きく分けて4つのグループがあり、それぞれに先住民との係わり方は異なっていた。まず、慣れぬ土地においてその生存さえも先住民に頼っていた毛皮商人。この場合には、双方ともが利益を享受できる友好関係にあった。ただし、中には、利益をむさぼるためだけに先住民を利用する悪辣な商人、投機家もかなりいた。次に、先住民を邪魔者として特定地域に追いやり、なるべく接触は避けたいと願っていた入植者グループ。第3のグループは、当初から先住民教育に係わっており、その改宗・教化教育により西欧支配を増大するのに中心的役割を果たした宣教師などのキリスト教団。そして、第4に、移殖者や宣教師にとり望ましい先住民族との関係樹立を可能にした政府である。この最後の二者が植民支配の権威者として同化教育に大きく関与したのである。

初期においては、植民政府と先住民族の利益は一致しており、19世紀になるまで、両者の関係は政治的、経済的に相互を益し合える国と国との関係であった。イギリス帝国政府は国王宣言(Royal Proclamation, 1763)に基づき条約交渉を通じて先住民から土地を取得しただけで

はなく、先住民は貴重な戦力であった。一方、先住民族の中には、地代により農業や資源開発をする部族もあった。この時点では、先住民族は自らの意志で取捨選択しながら、文化面、生活面での変化の方向とペースを自ら決めていた<sup>(2)</sup> と言えよう。

しかし帝国政府による先住民政策は1830年に大きく転換した。軍事同胞として先住民を使うことに基づいた政策から、彼等を“野蛮”な状態から西欧人と同じレベルへ引き上げ前進させるために、宗教教育、読み書きの訓練、基礎的農業や技術における訓練を通して教化しなければいけないという権威的保護政策へと移行した。宣教師はどうかというと、先住民族の改宗を第一の命として受けていたわけだが、先住民の非衛生的な生活状態、原始的習俗に接し、しだいに先住民を“文明化”し、“野蛮”な習慣や非文明的生活様式を止めさせ、救わなければならないと考えるようになっていった。政府も教団もその目標は、西欧の価値観や行動様式を前提としたカナダ主流文化への先住民の同化であった。政府による全日制の学校が創設され始め、宣教師は孤児や貧困家庭の子供などのために小規模ではあったが教会で全日制や寄宿制の学校を運営していた。

上述のような方針の変化には、先住民族の毛皮交易や軍事上のパートナーとしての有用性の喪失、移入が第一義となったことが主な要因として考えられる。この保護的、一方向的関係は、1867年の英領北アメリカ法 (British North America Act) により合法化された。その第91条で先住民族はカナダ連邦政府の管轄下に置かれ、先住民としての独立した身分を取り上げられた。さらに、1876年に発布された最初の包括的インディアン法により先住民自治は廃止され、財政、医療、教育を含む公的サービスは連邦政府下に置かれ、狩猟、漁労や飲酒に至るまで規制されるようになった。先住民族のために留保された土地も彼等が文化的に十分教化されるまで政府が管理することになった。<sup>(3)</sup> 要するに、認定インディアン (status Indian)<sup>(4)</sup> は助成金や税法上における特権は認められたが、自治、土地を取り上げられたわけで、これにより伝統文化は抑圧され、先住民は依存状態へと封じ込められた。また、この頃、天然痘、麻疹、結核などの蔓延により先住民人口が激減したことや、先住民族の生活形態の変化により伝統的狩猟、漁労による移動生活を維持することが難しくなってきたために、先住民の中からも積極的に西欧文明への適応、子供への西欧式教育を願う者が出てきており、実態の分からないままに政府や教団の同化政策をはからずも促したと言えるだろう。

先住民の中には正式の学校教育を軍隊の訓練ではないかなどと疑いの目で見るとは、子供たちが先住民文化と断絶することなしに学校教育を受けられるのなら、読み書きの習得など主流文化と接触することにより得られる利点は大きいと考える親や部族は学校設立を要求した。政府も子供の社会的、経済的状況の如何にかかわらず、白人も先住民も基礎教育が受けられるような設備を整え始めた。<sup>(5)</sup>

しかし、同化教育の効果はなかなかあがらなかった。従って、連邦政府はアメリカの例に倣って先住民の子供を親や地域の悪環境から離すのが最善だと判断し、1880年にカナダでもアメリカと同じような寄宿学校制度を実施することにし、キリスト教団にそれを委託した。そうすることにより、政府は経費を大幅に削減でき、教団は先住民社会でのその権威を保持できた。政府の助成により、農業技術などの習得を目的とした居留地から遠く離れた専門寄宿学校 (industrial schools) や、小さい子供のための居留地に近い寄宿学校が創られた。寄宿学校では、

先住民の言語、伝統、文化、習慣は一切否定され、生活の全てが、すなわち、言語、行動、時間、衣服に至るまで規制された。カリキュラムは基礎教育を半日、農業、工芸、家事などの技術訓練を半日として組まれていた。狙いは寄宿学校での生活を通して、先住民の若者を抑圧し、彼等の言語と文化を払拭することであった。寄宿学校を体験した多くの先住民がそれを「監獄」であったと評しているが、具体的には後で詳しく検討する。

19世紀末になり拡大経済、中央集権化へと移行すると、専門寄宿学校は、経費がかかりすぎるし、出席率は低く、かつ、先住民を同化させるには不十分だという理由で、助成金を削減された。そのために、カトリックとプロテスタントの学校は学生と助成金を得るために競い、資金難を切り抜けるために学生の作った農作物を売っていた学校もあった。<sup>(6)</sup> それでも、1900年までには61の寄宿学校が設立されており、6歳から15歳までの2万人の学齢期の子供のうち3,825人が22の専門寄宿学校、および、39の寄宿学校に在籍しており、6,349人が226の全日制の学校に登録していた。<sup>(7)</sup>

20世紀に入ると支配社会の態度は再び変わった。大量の移民により先住民労働者に頼らなくてもよくなると、これまで寄宿学校は経費はかかっても将来の国益を考えると優れた投資だとみなされていたのが、実利的結果が出なければその莫大な支出は正当化できないと考えられようになった。その結果、1910年には先住民を「その生活環境において文化生活に適応するように教育する」と教育政策が改訂された。

このような状況下で、寄宿学校は依然として学生数に応じて助成金を得てはいたが、健康上の新规定により一人当たりの専有スペースを増やしたり、設備や生活状態の改善をしなければならなくなり、実際の学生数は減った。助成金は頭数に応じて出たので、維持、経営にかかる費用は学校を運営している宗教団体や寄付によっても捻出されなければならなくなり、この予算不足が質的、量的に貧しい寄宿学校の食事、職員不足を補うための過重な労働、毛布、衣服などの不足による寒さなどの要因となったと言えるであろう。この頃から懲罰、食事などに関しての不満、死亡原因の調査要請がはじめており、調査も行なわれたが、それに対する行政措置には至らなかった。

1920年のインディアン法の修正で、先住民の子供は学校教育を義務づけられ、強制的に連れ去られたりした。親が学校へ送ることを拒否した場合には罰金を課せられたり、監獄に送られたりした。インディアン局 (Bureau of Indian Affairs) はいくつかの居留地に大きな学校を建て、その指導目標を8年生までに実際の技術と基礎的読み書きを習得することにおいた。この頃カナダの3/4の学齢期の先住民が小学校1年から3年に籍を置き、非常に初歩的な読み書きの教育を受けていた。しかし、実際は、義務教育制に抵抗する家族もあり、1951年になるまで、5歳以上の子供の場合、カナダ全体では6割が正式の学校教育を受けていたのに対して、先住民は3割しか受けていなかった。6年以上に進級したのはカナダ全体の3割に対してわずか1割であった。<sup>(8)</sup>

20世紀中頃から教会と政府の方針はさらに大きく乖離していった。政府は先住民と非先住民の子供の混合教育に切り替え始めたが、教会は分離教育政策をとり続けた。1951年のインディアン法の改正で連邦政府は、先住民をカナダ社会へ統合することを目的に、先住民の子供が白人と同じ州立や私立学校に入れるようにした。教会は今まで保持してきた権威が侵害されるこ

とを恐れ反発したが、この法案で、理論的には宗教の権利も保護され、親の許可なく宗教系の学校には入れなくなった。この政策の下で、先住民子弟の外の世界との接触が増えるとともに、学校側の先住民の言語への姿勢も変わり、カリキュラムにもその言語が取り入れられるようになってきた。

1960年から1970年の10年間にかけては教会の影響力がいっそう弱くなり、政府の統制と先住民自らの教育への関与が増大した時である。教会は寄宿学校制を採り続けたが、政府の政策変更、教団からの援助の削減、先住民の意識の増大などによりその管理力は年毎に減少していった。政府の干渉により宗教教育の時間も削減されたし、教団への入信者の減少により、教団から学校へスタッフを送ることも難しくなったので、一般人を教職員として雇う必要が出てきた。従って、子供達は寄宿学校でも非先住民学校と同じような学校教育、社会的経験ができるようになり、厳しい規則もいくぶん緩和された。しかし、このような状況にもかかわらず、教会は、インディアンのコミュニティは教育上さまざまな問題があり、文化的に異なるので特殊教育が必要であると主張し、さらに時流に抵抗した。

教会にとりさらに打撃となったのは、親や学生からの抗議運動にも火がついたことである。懲罰はもちろんのこと非人間的に番号を付けられたり、生徒間の序列による管理体制や性別教育のために学生は教師だけではなくお互いからも孤立していたし、宗教上の教義と聖職者から受ける待遇の格差にも不満を持った。教育の質も、政府の監査官からも学生からも疑問視された。教室では「公爵や公爵夫人について学び、納屋で働く時には指導してくれる人はいなかった」<sup>9)</sup>というコメントからも分かるように、学生自身卒業する時にこれでは社会人となる準備ができていないと感じたし、対人関係での問題を処理する指導も全く行なわれなかった。このような不満や抗議の声が高まる中で、居留地の全日制学校や一般公立学校に通うという選択もあったので、親は寄宿学校から子供を出すこともできたが、それでもなお多くの親が、貧困、バス通学、一般学校での差別などの理由で、自らも通い問題があると分かっているにもかかわらず、週末には子供達が家へ帰れる半寄宿学校 (semi-residential schools) や寄宿学校を採らざるをえなかった。

1969年の白書が先住民教育の転換への大きな引き金となった。この白書はインディアンに対するサービスを他のカナダ人に対するのと同じ省や政府がすることにより、先住民に対する制度上、憲法上の差別をなくし、白人が受けているのと同様のサービスを供与し、インディアン省 (Department of Indian Affairs) を廃止し、居留地制度をなくすことを提案していた。先住民はこれを同化統合による先住民絶滅政策の一種の偽装であり、既得権を奪うものと考え、自らの運命を自らの手に取り戻す必要を痛感し、反対運動を展開した。

この白書により連邦政府の助成を受けていたアルバータ州北東部にあるローマ・カトリック教会経営の Blue Quills 寄宿学校が閉鎖されると分かると、Blue Quills の先住民は教育委員会を組織して、学校経営を居留地社会に移譲し、現職員を先住民に代えるように政府に要請を出した。各地から先住民が応援に駆けつけ300名ほどが学校の施設に一ヶ月座り込み、占拠した。政府はやむなく Blue Quills 先住民教育委員会に教育を委ねることにし、1970年9月1日に Blue Quills はカナダ最初のインディアンの管理による学校となった。これは外からの価値観の押しつけに対する受け身的態度の終焉であり、先住民の自己決定権へと流れを変えるものと

なった。<sup>(10)</sup> 1973年には全国インディアン同盟 (National Indian Brotherhood) により提出された「インディアン管理によるインディアンの教育」(Indian Control of Indian Education) が連邦政府の政策として採用され、最後の寄宿学校が1981年に閉鎖されたことにより強制的隔離同化教育は幕を閉じた。

結局一世紀近くにわたった寄宿学校を通しての同化政策は失敗したことになる。これは、先住民族が自らの文化形態を変えることに抵抗し続けたことや教育、教育設備への政府の予算不足にもよるだろうが、戦後世界の各地で起こった植民主義への抵抗運動により主流社会の態度が変化したこと、60年代のアメリカの市民権運動の影響、そして、何よりも先住民族の自決権への意識の高まりが、この変化をもたらした<sup>(11)</sup> と言えるだろう。

教育における自己管理を獲得はしたものの、すでに述べたように長期に及んだ同化教育の禍根を現在まだ先住民社会が問題として抱えている。そこで、次節では、先住民の伝統的教育法を概観し、それがいかに西洋の科学的世界観、ビクトリア朝的倫理観、西洋個人主義と異なっていたか考察してから、具体的な寄宿学校教育に関する検討へと論を進めていく。

### 3 伝統的インディアンの教育法

カナダの先住民族は、大きく分けて約50の種族から成っており、それぞれが言語、文化、生活環境におき異なっていたが、総てある文化的特性を共有していた。超自然的世界観に立ち生あるもの全てにおける合一性を信じていたので、世俗的なものと聖なるものとの区別はなく、子どもを教育する際に世界をホリスティックにとらえて教えることが非常に大切なことであった。生活の全領域が日常生活を通して体験的に学習できるようになっていたから、西欧社会と接触する前の先住民族には学校という正式の場での教育は必要でなく、親、親戚、長老を主とした所属する共同体自体が教育の場であった。大家族制を採っており、春から秋にかけては、漁労、狩猟、採集などのために移動し、キャンプ生活をし、冬は定住地で生活したり、狩猟のため移動したりした。そのため、仕事はほとんど個人単位ではなく、集団でした。子供は周りの大人たちがすることをじっと観察し、物語を通して語られる教えを傾聴し、身体で学んでいかなければならず、質問や口答えをすることは許されなかった。子供たちは祖父、祖母を教師として敬い、彼等から実用的生活技術を学ぶことが多かったが、周りの大人たち全員の愛情に包まれてそれぞれに相応しい役割を大人として果たせるようにと育てられた。Mary Lingman の *Sammy Goes to Residential School* や Shirley Sterling の *My Name is Seepeetza* などには祖父母や両親との精神的絆、日常生活レベルでの体験的学習過程がのびやかに語られている。生あるものへの崇敬などの精神性、分け合うことによる互惠関係や平等分割主義、共同体における個人の役割と責任、家族への義務、自立心などが重要な意味を持っており、子供たちは生活の中から周囲の環境を破壊することなくいかに効果的に自然を活用するかを学んでいった。<sup>(12)</sup> 教育全般にわたって大切なのは精神性で、ある年齢に達した時には自らの守護霊を見つけるために絶食し森に何日もこもるといったような厳しい修業も行なわれた。しかし、子供達の生活には、時間により規定された堅苦しい規律ではなく自然に沿って生活する自由があり、鞭や嘲笑ではなく周囲の温かい目がいつも注がれていたと言える。

ただ、このような地に布教活動のために赴任した宣教師にとっては、移動生活や集団生活による衛生上の問題、迷信や“悪霊”に満ちた“邪宗”、“ルーズな”道徳観、読み書きなどの教育の欠落は、文化的優位に立つ者の立場として、先住民のために当然正さなければならないことと考えられた。そこで、次節では、宣教師によるこの保護者的立場に立った同化・教化を目的とした寄宿学校がどのようなものであったか、その教育内容と影響を先住民の視点を通して考察する。

#### 4 寄宿学校における教育とその先住民に与えた影響

##### 4.1. 寄宿学校での教育

わけも分からないままに学校に置いていかれ、親からひき離されたショックと悲しみにまだ打ちひしがれている時に、子供達は服を脱がされ、いるいないにかかわらずシラミをとるために DDT をかけられたり風呂に入れられ、女の子は髪を切られた。次に番号を付けられ、囚人服のような制服に着替えさせられた。ここに、多くの先住民にとり愛のない規律と懲罰の何年という日々が始まったのである。*Indian School Days* に描かれている平均的寄宿学校での一日は次のようである (47)。

6 : 15	起床
6 : 45—7 : 25	礼拝
7 : 30—8 : 00	朝食 (粥, パン, ラード, 緑茶)
8 : 05—8 : 55	仕事
9 : 00—11 : 55	授業 / 仕事
12 : 00—12 : 25	昼食 (大麦スープ / 豆スープ / 野菜スープ, パン, 緑茶)
12 : 30—1 : 10	スポーツ / ゲーム
1 : 15—4 : 15	仕事 / 授業 (午前と午後交代)
4 : 15—4 : 30	スナック (生の人参 / キャベツ / かぶなど)
4 : 30—4 : 55	仕事, 雑用
5 : 00—5 : 55	勉強
6 : 00—6 : 25	夕食 (昼食と同じ)
6 : 30—7 : 25	スポーツ / ゲーム / リハーサル
7 : 30—8 : 55	勉強 (年少者は 7 : 30 消灯) <sup>(13)</sup>
9 : 00—9 : 25	寝る準備
9 : 30	消灯

予定時間前と予定時間に鐘がゴンゴンと鳴り、整列、行進、点呼、祈りに一日のかなりの時間が割かれた。1950, 60年代には週末に親が訪ねてきたり、帰れる学校もあったが、それまでは家へ帰れるのは夏休みだけであった。その休みでさえなるべく親から離れた方がよいという理由で短くした学校もある。<sup>(14)</sup>

授業では主として英語の基礎的読み書きが学習された。職業訓練としては、男子は靴、椅子、家具作りや鍛冶屋の仕事のような将来役に立ち自立できるような技術を習い、女子は裁縫、編み物、料理、洗濯、アイロンかけなど妻やメイドとして役に立つような技術を習った。これも、50年代頃からは一般の学校のカリキュラムにかなり近くなったようであり、授業に午前も午後も割かれるようになった。このような教育の狙いは、宗教教育、基本的読み書きの習得だけでなく、白人社会に適応できるように“野蛮”な親から離すことにより、“邪教”の慣習を止めさせ、勤勉と儉約の習慣や文明生活に合った行動様式を形成することであった。しかし、実際は学校を維持するための雑用や労働をほとんど学生が負担するようになっており、「人間ブルドーザー」とある学生が表したほどの仕事が課せられた。

女子校と男子校があるところでは、学生は性により分けられ、ビクトリア朝的倫理観に基づき、お互いを見ただけでも罰せられ、女子はシャワーを浴びるにもタオルを巻いた。行動規制の方法としては、制裁、隔離、辱め、脅し、説得、序列管理、衝突の抑圧などがあった。まれに報奨として特別な食べ物、好きな仕事などの供与があったが、ほとんどが制裁としての罰で、隔離、鞭打ち、殴打、縛り上げ、蹴り上げ、食事抜き、追加仕事、遊び時間の削除などであった。電気椅子によるショック療法を行っていた学校すらあったという。<sup>(15)</sup> 罰はささいなことと与えられ、食事中に男子に笑いかけたり、母語を話すことはもちろん食事中に話しても罰せられた。反抗的態度、逃走の罰は何十回にも及ぶ鞭打ちと重かった。これらの罰は、司祭や尼僧のきまぐれで行なわれることが多かったようで、これを逃れるためには司祭の機嫌をとってインディアン的なものを一切否定しなければならなかった。<sup>(16)</sup> 「叱られたこともなければ、きつい言葉をかけられたこともなく、ぶたれたこともなかった」<sup>(17)</sup> という育てられ方をしてきた者には、このような教育は「監獄」以上のものであっただろう。ただ、彼等の文化の中には年長者に対する従順があったし、司祭などの虐待について話すことは罪だと教えられていたので、子供達はそれを口にするに抵抗を感じた。たとえ話そうとしても、「親の恐怖心、共同体の圧力、教会の力により黙らされた」<sup>(18)</sup> のである。

何年間にも及ぶ寄宿学校の粗悪な食事、劣悪な生活環境、寒さに子供たちの健康は冒され、死亡する者もあり、どうにか修了した学生も望ましい効果をあげる者は少なかった。先住民文化に「逆戻り」するか、自虐的になるか、能力があっても、移植者と競合関係になる恐れから差別されるかであった。

結局、教育レベルは、教育者の側の偏見や資格不足のせいもあり、学生たちが社会で言語を使用できるようなレベルにすら達しておらず、技術面での学習も、役に立ったこともあっただろうが、それで身を立てるには不十分であった。言語、文化を奪われ、偏見や差別のため主流社会には受け入れられず、居留地の自然環境で生きていく知恵、技術にも欠落した子供達はどちらの社会にも精神的にも物理的にも適合できなくなってしまっていた。あるクリー族の首長は自らの混乱した状態を次のように語っている。

二つの文化の間に宙吊りになったように、白人でも、インディアンでもなかった。一方には親から習ったこと、払拭された生活様式があり、もう一方にはきちんとした教育を受けなかったため、またそこに入れなかったために十分には理解できなかった白人のやり方



があった。<sup>(19)</sup>

学校の教師に習うことと長老たちから習うことは正反対のことで、二つの文化の狭間に置かれ、どちらにも帰属できなくなってしまったのである。ただ、不当に扱われたことへの精神的抵抗は、後で検討するが、同化とは全く逆の結果、すなわち、インディアンとしてのアイデンティティーを固守する気持ちがある者におきさらに強めたとは言えるようだ。

寄宿学校の実体がどうであったかを知るのに、それを体験した者の言葉ほど如実にそれを語るものはないだろう。現在寄宿学校について先住民により書かれた作品がかなりあるが、次に特に二冊の文学作品と一冊の文化人類学系作品を取り上げて考えてみる。作者は3人共1940年代に寄宿学校に在籍していたのだが、作品はそれぞれ70年代、80年代、90年代に書かれたものである。その描き方は、視点の違いにもよるが、時代の流れをも多少反映していると言えるだろう。

#### 4.2. 先住民作家により描き出された寄宿学校

特に寄宿学校をテーマに扱った作品ではないが、先住民女流作家の自伝作品としてまず第一に挙げられるであろう *Halfbreed* を見てみよう。Maria Campbell は寄宿学校での窒息するような生活を次のように記している。

7歳の時に寄宿学校に入った。<sup>(20)</sup> …果てしなく祈りの時間が続いた。読書や授業をした記憶はなく、ただ祈りと仕事、寮や廊下の掃除があった。…一回クリー語を話したために窓も明かり取りもない小さい押し入れに閉じこめられた。何時間とも思われる時間が経過した後に出された時には、恐怖で体が麻痺していた。…学校での最後の日、父が迎えに来てくれた時の開放感を今でも覚えている (44)。

Campbell は9歳の時に白人と一緒に混合学校に入ったが、その時先住民としての誇りを高く掲げる祖母に「白人はおまえにおまえの仲間を嫌うようにさせるのだよ」(47) と言われた。その言葉ほど先住民の置かれた壊滅的状况を表すものはないだろうと思われる。寄宿学校で野蛮人、劣った人種と言われ続け、誇りも自尊心も剝奪され、恥じの念だけ残った状態で、それに輪をかけるように、世間一般の白人の偏見、差別に曝されて、全てから孤立し、自己嫌悪に陥る。ではいっそのような白人の抱く先住民のステレオタイプにはまってやろうじゃないかと開き直り、自虐的に酒や薬漬けの生活にはまっていくパタンが *Halfbreed*, *Slash*, *Inside Out* などに描かれている。

寄宿学校での生活がどのようなものであったか詳細にわたって知るのによい資料となっているのは、Basil H. Johnston の *Indian School Days* である。そこでの生活を端的に表しており、何回も繰り返してくるのは、「空腹感」と「唯一の望みは家へ戻ること」という言葉である。Johnston は、オンタリオ州北部のスパニッシュという村にあるローマ・カトリック教会の男子校 St. Peter Claver 寄宿学校で、1939年から44年までと、47年から50年までの8年あまりを過ごした。「イエズス会の教師は入信した時に世間や世俗的感情を捨て去るので、暖かさ、同情、愛情などを示すことはできなかつたし、人間の困窮に無関心だった」(7) と規律のみで愛

のない寄宿生活を理由づけている。

135人の4歳から16歳の学生のほとんどが崩壊家庭の出身だった。学校の存続目的は二つ、職業訓練と聖職者の養成であった。職業訓練は10以上と多岐に渡っていたが、卒業生には誰もこのような職業に就いた者はいなかった。そのうえ、訓練を受けた職業は新しい技術の導入によりすでに役に立たなくなっていた。学校は司祭も生まなかったし、結局、外の世界で何かをする準備には全くならなかつたと指摘している(26-7)。また、16歳まで寄宿学校にいなければならないのに、8年生までしかないのに、何度も同じ学年を繰り返させられた制度上の問題を挙げ、自らの価値と尊厳を認めていなければ、知性も知恵も要らないと思わせるほどカリキュラムの標準は低かつたと述べている(66)。

教師は偏見に満ちた態度で生徒に接した。喫煙の嫌疑をかけられた時に、吸っていないと本当のことを言ったために、褒められるどころか何回も鞭で打たれ、苦々しい恨みの気持ちを押しえ難く、「教師が自らの偏見を信じるのなら、真実を語るより嘘を言うほうがよい」(160)とマイナスに作用する教育を描いている。こんな状況におきできる唯一の抵抗は「受け身的抵抗」で、グズグズ指示に従うことだった(30)。ただ、これは教師には反抗というよりは、インディアンは怠け者で、頼りにならず、訓練不可能なのだという気持ちをさらに強く抱かせる結果となつただろうと思われる。

入った日から出る日までずっと抱いていた望みはただ家へ帰ることであった。しかし、ようやく帰れた時には、独りで獵をしたり木を切ったりする食にも窮するような生活の困難から逃れる唯一の方法として、始まったばかりの高校のプログラムに戻るのである。

Johnstonが寄宿学校での圧制の中で失わなかつたのは「僕たちは何も持っていなかつたけれど、心は貧しくなかつた」(101)という気持ちで、卒業して別れる時に友達が、「俺たち強くなつたね。奴等には俺たちを叩きのめすことはできなかつたよ」(243)と誇らしげに語つたという言葉で本を終えている。

Johnstonが寄宿学校での辛い生活を少年時代の学友との絆への愛惜の念やユーモアも交え、作家として子供の視点から生き生きと描いているのに対して、Isabelle Knockwoodは、*Out of the Depths*で自らの体験のみならず当時の学生へのインタビュー、図書館、考古資料館での調査などにに基づき、文化人類学的立場から劣悪な強制収容所同然の寄宿生活を直視している。そうすることが元寄宿学校生の受けた傷の癒し、および、そこから派生している先住民族が現在抱えている問題への解決に繋がると信じてのことである。Knockwoodはこの姿勢を最初から明確にしており、自署入りの本にも「癒しの輪を活発にしていこう」と書かれてあるが、それでも、筆者には実態を知らない白人社会に対する告発と思えるほど衝撃的内容であった。1992年に出版された本であるが、“かれら”は寄宿学校でのことを知られたくないから、テープや原稿を取り上げたり居留地の家や職まで取り上げるかもしれないと友人に言われながら書いた(10)と述べているほど冷徹な目で寄宿生活の悲惨な恐怖の生活を浮き彫りにしている。

KnockwoodはNova Scotia州にあるShubenacadie寄宿学校に1936年から1947年まで合計11年間居た。繰り返し出てくるのは「虐待」、「恐怖」、「屈辱」の体験である。「全ての尼僧が残酷ではなかつた」と言っているが、「直接少年少女の監督に当たった神父や尼がキリスト教の愛や許しの手本になるどころか、恐怖の権化であること」に非常に困惑し、「子供に対する尼の

憎しみの深さ」は未だに謎であると述懐している (45)。

「親、長老から習ったことの全てから強制的に断絶され、新しいことは全て恐怖の雰囲気の中で学習され」(50)、「想像力や興味を高めるような試みはなされず、教育は命令、脅迫、嘲笑により行なわれ、学生の思いや感情には一切無関心であった」(82)と不毛の教育を語っている。たえず何をするにも恐怖の念があり、上手にやれると分かっている時にも「自分のこと何様だと思っているの」と嘲笑されるのが怖く、「どうして最後までやらなかったの」と叱責されるほうを取り、決してベストは尽くさないようにしたと言う (83)。Johnstonと同じく偏見による教育により、インディアンにとって良いことをすることは間違いだということを心に植え付けられたのである。おねしょをした子供は、「小便たらし」という紙を背中に張られたり、汚れたシーツを一日中かむらされたり、食べ物を残すと無理に何度も口の中に突っ込まれたりと屈辱的な扱いを受けた。

特に悲惨なのは、子供達が機械もスイッチも高く届かないような状況で洗濯用圧搾機を操作する際、監督者も安全装置も安全教育もなしに働かされ、手切断など大怪我をすることがあったことである。そしてその状況は度重なる事故にもかかわらず Knockwood が居た11年間改善されなかったという。機械操作中の事故の医療費に関して調査があったが、蒸気が立ちこめる暑い部屋での事故であったにもかかわらず、「手を暖めようとして怪我をした」と常識で考えてあり得ないことが事実として通用した (66)。

何度も頭を叩かれたためにつんぼになってしまった少女がいたり (95)、反抗したために叩きのめされたあげく病棟へ連れて行かれた少女は蒸発してしまった。「病棟は病気の子供達が永久に消えてしまう場所」と考えられた。記録にはこの少女に関して「結核サナトリウムに送られた」と記してあるが、いつ死亡したかは不明である (108)。

現金を盗んだ嫌疑をかけられたために、少年達が不当に過酷な鞭打ちを受け、その裁判が1934年に行なわれた。少年達の体に何カ月も前の傷痕が公聴会の日にも依然として残っているというのに、裁判官も新聞記者も、司祭の過酷な罰は与えていないという言葉信じた (147)。このように公正な調査、裁判が行なわれなかった例は、寄宿学校をテーマに逃亡少年の死や集団自殺による死のケース・スタディを扱った Elizabeth Furniss による *Victims of Benevolence* などにおいても詳細に検証されている。

寄宿学校では、対外的イメージを取り繕う工作もなされた。インディアン省から役人や監査官が来る時には太い鞭は捨てられ、子供達は写真用の服に着替えさせられ、食事もよくなった。親などへの手紙は検閲されたし、休暇で帰る時には、学校への忠誠心を重んじ学校での喧嘩や罰に関しては話さないように脅かされた (141-2)。

Knockwood は元学生の全員がそれぞれ違う話をするだろうが、肯定的評価を下すのは特殊なケースであるとして次のように述べている。

貴重な技術を学んだと言う人は殴打があったことを否定したり、それは正当なものだったと言ったりするだろう。だが、その人達は“いい子”だったり、守ってくれる兄や姉が居たり、先生のお気に入りだったり、子供の教育は体罰によってするものだと寄宿学校で習った親に虐待して育てられ学校が避難所となっていた子供達だっただろう (156)。

しかし、ほとんどの場合が「母語を話した罰は初日から始まったが、その罰は大人になった今でも受けている。何故なら、再学習しなければならない母語で、自分たちが何者なのか、社会とどう関わったらいいのかを、現在学習しているところだからである」(98)と永続的な罰の影響を述べている。そして、その罰から解き放たれるのには語ることで、「次はあなたが語る番ですよ」という言葉で Knockwood は自らの話を閉じている。

宗派、学校、個人により体験は異なるだろうし、寄宿学校に在籍していた時の年齢、年代によっても違うだろうが、これで、寄宿学校がどんな場所であったかはかなり明確になったと思われる。次に、検討した3作品、及び、他の文献、インタビュー<sup>(21)</sup>などから、寄宿学校の影響を整理してみる。

### 4.3. 寄宿学校の影響

まずプラス面を考えてみると崩壊家庭の子供への避難所としての機能、および、白人社会に同化し生活するのに必要な規律の修得、英語の読み書きの習得、男子は、農業、大工仕事など必要な技術の習得、女子は、家事、料理などの習得が挙げられるだろう。しかし、それは少数の学生においてであり、これにより膨大なマイナス面を正当化できるものではないと言えるだろう。

また、今日の民権運動の指導者、先住民作家などは、当時の教育者の意図したことではなかったが、皮肉にも寄宿学校教育の産物であるという論もある。<sup>(22)</sup> 確かに、卒業生は白人から習った方法を宗教の自由に対する先住民族の市民権を守るのに用い、学校で修得したことを自らの社会制度に組み込み、土地補償請求など白人支配に対して挑戦する手段としたと言えるだろう。また、長い目で見ると、寄宿学校が先住民族の文化形態の保持に逆作用し、宣教師や政府の同化政策への抵抗を誘発し、汎先住民族という概念の流布に寄与し、ついには、現代の先住民権運動や文化的、教育的活動に従事する世代を生み出した<sup>(23)</sup>ともいえるかもしれない。しかし、先住民族が精神的、文化的に受けた傷は残り、民族全体の社会的地位向上とはなっていないのが現状であり、Furniss が述べているように、意図的結果と自然発生的結果は区別する必要がある<sup>(24)</sup>と思われる。1991年に開かれた「第一回寄宿学校全国会議」(First National Conference on Residential Schools)の開会の辞で先住民の成功例は「寄宿学校の産物ではなく、先住民精神の力の証である」と明言しているが、<sup>(25)</sup> 実に、これは苦難に満ちた圧制教育を切り抜けてきた反骨精神の賜物であると言えるのではないかと思う。

次にマイナス面であるが、新保満氏は『カナダの素顔』で寄宿学校の功罪として「罪」のみ挙げている。1.母語の喪失、2.「科学的思考」の普及によるインディアンの宗教の弱体化、3.長老の権威の弱体化、4.若者の欲求不満の増加とその精神的歯止めの崩壊、5.家族形態の変容である。これは強制的隔離教育のもたらした直接的現象としての影響と言えるであろう。1996年3月の「寄宿学校に関する首長特別会議」でも言語、儀式、家族、伝統文化の制度的崩壊の元はこの寄宿学校にあるとしている。この民族の受けた文化破壊による直接的結果は、当然ながら根深く長期的な心理的、社会的影響を、寄宿学校教育を受けた者だけでなく、その親に教育された後の世代にまで及ぼしており、現在の先住民問題全てに関係していることが分かる。物語口承という伝統伝達の手段であった言語の喪失、文化・誇り・イニシヤティブの喪失、

精神的混乱、低い自己評価に始まり、アルコール中毒・麻薬中毒・中退・自殺・性的虐待・家庭内暴力・犯罪・刑務所人口などにおける先住民の割合の高さ、親としての養育技術の欠落、家庭崩壊などの諸現象が寄宿学校教育を一因としている<sup>(26)</sup>と言えるだろう。

学校に理由も告げずに置いていった親を恨み、愛をかけてくれる人も世話をしてくれる人もいない状況に何年も置かれ、嘲笑され、殴られ、虐待された世代がつい最近まで何代も続いたのである。怒りと屈辱に満ちた心が許しや愛の気持ちに向かう<sup>(27)</sup>のには計り知れないほど辛い長い道程があるだろう。一方、親は親で生活苦のためにやむなく子供を手放したり、または無理に連れ去られてしまったのである。子供から切り離された寂しさから酒浸りになっているうちに、子供が夏に帰ってきた時にはもう“家庭”はなくなっていたり、隔絶のため親子はもちろん兄弟姉妹も“他人”になっていたりした。そのうえ、寄宿学校で育ったため虐待したり罰する以外に養育方法を知らなかったり、養育を放棄したり、<sup>(28)</sup>子供が罰せられるのを恐れ家庭でも母語を教えなかったりと悪循環が繰り返され、それを今の若い世代も引きずっているのである。

これほどの状況に先住民族がただ耐えていたのだろうか。学校制度の中で、子供達にできた抵抗は、Johnston も言っているように「受け身的抵抗」で、のろのろやったり、食べ物を盗んだり、嘘をついたり、叩かれても泣かなかったり、無表情だったり、密かに母語を話したりなどがこれに含まれる。<sup>(29)</sup> Celia Haig-Brown は13人の元学生のインタビューに基づき書いた *Resistance and Renewal* で、研究により判明したことは「文化侵略への抵抗」がずっとあったことだとしながら、ただ、学生や親による寄宿学校の侵略的存在への抵抗の度合いは深く複雑であったと述べている (1988: 25)。その複雑さを Furniss は先住民族とカナダ政府の構造的関係に帰している (1995: 15)。この関係により問題がチェックされないままになってしまう偏見に満ちた不平等の構造が問題であり、虐待に関してなかなか真相を語れなかったり、語っても信じてもらえなかったり、調査や抗議の書面をインディアン局に提出しても先住民に有利には運ばないようになっていた。Furniss が実施したような記録の再チェックなどこれから検証されなければならないケースがまだたくさんあると思われる。

寄宿学校に携わった宣教師や司祭に関しては、「文化的、宗教的帝国主義」の時代に責任を帰したり、<sup>(30)</sup>自己弁護的であるよりほかには明確な立場はあまり示されていないようなので、どのようにして神の名におき虐待や記録改竄が正当化されたかは分からない。<sup>(31)</sup>ただ、始めた当初は“劣った野蛮人”に対する偏見はあったかもしれないが、善意で教化を始め、献身的努力をしたことは確かであったと思うし、子供達が救われる道は悪習から抜け出すことであると確信もしていただろう。また少数ではあったが Edward F. Wilson のように寄宿学校を設立し、15年近く同化教育、すなわち、文化置き換え (cultural replacement) に携わった後に、その誤りに気づき、考えを180度変えて19世紀後半にすでに先住民の自発的文化統合 (cultural synthesis)、自治独立の必要性を説き始めた宣教師もいた。<sup>(32)</sup>

## 5 おわりに

1970年代ごろから先住民作家が寄宿学校での体験を語り始めたが、寄宿学校での体験を公に

話すことは、外圧のみならず、その病的体験を心の奥深くに埋没させて忘れ去りたいという理由からも長いことさしひかえられてきた。しかし、87年に「世界先住民民族教育会議」(World Indigenous Peoples Conference on Education)がバンクーバーで開かれたり、80年代後半に寄宿学校職員であったカトリックやプロテスタントの聖職者に対して元学生から性的虐待に関する訴訟が行なわれたりしたことにより、<sup>(33)</sup> 寄宿学校制度へのメディアの関心が高まった。さらに、91年の寄宿学校全国会議で元寄宿学校生が当時の体験を語っても圧力を受けることのないように支え合い、政府や教会に対してもそれを支持するようという要請が出された。また、同年、カナダ全土にあった80近くの寄宿学校の半数以上を経営していたローマ・カトリックのOblates of Mary Immaculate会などから先住民社会が寄宿学校時代に受けた虐待に対して公式に謝罪がなされた。<sup>(34)</sup> このような状況下で、90年代に入って多くの先住民が、精神的、肉体的、性的に受けた虐待や長期的視野から見たその心理的、社会的結果に関して、児童書、<sup>(35)</sup> テレビ番組、<sup>(36)</sup> 自伝、学術書などで語り始め、政府、教会関係の報告書、活動などもわずかではあるが出てき始めている。先住民の抱える問題解決の糸口として、寄宿学校制度をまず明白にすることは、非先住民の先住民問題への意識を高める方法である以上に、元学生には精神的癒しの道であり、先住民の若者にとっては現在置かれている状況を理解する手がかりともなると考えられてきている。と同時に、若者の未来を担う教育の果たす役割もいっそう重要になってきている。

現在カナダ政府は、過去の同化主義、保護主義に替わり、先住民自らその未来を形成していく権利を認めるようになってきており、先住民が第一国家民族として土地補償請求交渉をしたり、先住民の代表者が改憲会議にも列席できるようになった。しかしこのような進歩にもかかわらず多くの先住民社会がいまだに抱えている社会的、経済的問題の解決には、政府の政策変更や多数派社会の偏見、差別をなくす努力は言うまでもなく、先住民による過去の傷を癒すための民族的、社会的努力と並行して、民族の言語、伝統的文化や行動様式を尊重する態度を育成し、将来の経済的自立への武器ともなる教育の充実が望まれる。だからこそ、先住民が政治的自決運動や文化再生運動をする際に、子供の教育をまず自らの手に取り戻すことを最優先にしたのである。1973年に採用された「インディアンの管理によるインディアンの教育」はその目標として教育における地域社会の管理の増大、先住民教師の増員、先住民に合ったカリキュラムの開発、母語と先住民文化の授業数の増加などを掲げていた。<sup>(37)</sup> そして、もっかカナダの先住民部族の3/4が教育プログラムの全て、あるいは一部を管理しており、「クリー向けプロジェクト」(Cree Way Project)のような教育現場での自発的文化間の統合の成功例もある。<sup>(38)</sup> しかし、実施後20年あまりを経、現在インディアン管理による教育の問題点も出てきており、その分析、検討の段階にある。今後さらに解決していかなければならない点として、まず合法的枠組みの制度化と予算不足への対策がなされなければならないが、その他、設備の充実、先住民教師の養成、適切なカリキュラムや教材の開発、一貫した教育哲学の樹立、親と地域の連帯などが挙げられる。<sup>(39)</sup> この教育環境の整備、政府を含む社会全体の構造と意識の変化、先住民の意識と行動の変化、と3者が共に連帯して進んでいかなければ、先住民の置かれている窮状の解決には繋がらないだろう。

現在、寄宿学校教育や先住民教育に関する研究書が次々と出版されているが、寄宿学校の否

定的評価ばかりの中でそれに対抗して出てきている肯定的評価もさらに検討し、バランスのとれた全体像を構築する必要があると思われる。それには、政府や教団による過去を洗い直す努力も強く望まれる。これを中間報告として、寄宿学校制度を先住民の視点のみならず、教団関係者や職員の視点、および一般カナダ人の視点からも検証していきたいと考えている。

## 注

- (1) First Nations という言葉が現在カナダやアメリカの先住民を呼称する学術的、政治的に正しい言葉として使われている。本稿では便宜上先住民(族)という言葉を使っている。なお、イヌイトは検討の対象には含まれていない。
- (2) Jean Barman, Yvonne Hebert and Don McCaskill, "The Legacy of the Past : An Overview," *Indian Education in Canada Vol.1 : The Legacy*, 2-4 参照。
- (3) Ibid. : 4 参照。
- (4) カナダには認定インディアンと非認定インディアンという法的、行政的区分がある。前者は、政府から居留地を与えられており、医療、教育など無料で受けられ、居留地での収入には課税されず、禁漁期間や捕獲頭数の制約を受けない。一方、白人と結婚した女性や、フランス系混血であるメティーなど非認定インディアンにはこのような特典はなかった。(顛本孝「カナダインディアンの文化変化」『カナダ研究年報』13頁 参照)。しかし、1985年に導入された Bill C-31により認定インディアンの枠は拡大された。
- (5) Barman, "The Legacy of the Past : An Overview," 6 参照。
- (6) Furniss, *Victims of Benevolence*, 1992, 15.
- (7) Barman, "The Legacy of the Past : An Overview," 7.
- (8) Ibid. : 13参照。
- (9) Diane Persson, "The Changing Experience of Indian Residential Schooling : Blue Quills, 1931-1970," *Indian Education in Canada Vol.1 : The Legacy*, 161.
- (10) Ibid. : 157-167参照。
- (11) Barman, "The Legacy of the Past : An Overview," 14.
- (12) Ibid. : 3, 及び Kirkness, *First Nations and Schools*, 5-7 参照。
- (13) ( ) は日課の記述の中から筆者が付けた。
- (14) これは、Edward F. Wilson がオンタリオ州の Sault Ste. Marie に創設した Shingwauk Industrial School で行なったことであるが、助成金が生徒の在学日数により支払われるためにそうした学校もあった。
- (15) オンタリオ州 Fort Albany の St. Anne 寄宿学校でのことである (Sky Blue Mary Morin, "Number107," *Residential Schools : The Stolen Years*, 118)。
- (16) Armstrong, *Slash*, 53.
- (17) Lame Deer, "Lame Deer : The Seeker of Visions," *Growing Up Native American*, 139.
- (18) Pearl Achneepineskum, "Charlie Wants," *Residential Schools : The Stolen Years*, 6.
- (19) Barman, "The Legacy of The Past : An Overview," 11.
- (20) Maria Campbell は1947年に Saskatchewan 州 Beauval にある寄宿学校に入った。
- (21) ブリティッシュ・コロンビア大学の First Nations House of Learning 所属の元寄宿学校生である職員や学生など5人に筆者がインタビューした。
- (22) J. Donald Wilson, "No Blanket to be Worn in School" : The Education of Indians in Nine-

- teenth-Century Ontario,” *Indian Education in Canada, Vol.1 : The Legacy*, 64.
- (23) Jacqueline Gresko, “Creating Little Dominions within the Dominion : Early Catholic Indian Schools in Saskatchewan and British Columbia,” *Indian Education in Canada, Vol.1 : The Legacy*, 102.
- (24) Furniss は学校の目的が明らかに先住民族文化を根絶することであったのに、文化的抵抗、汎先住民族統一という付随的に起こった結果を理由に寄宿学校を弁護するのは正しくないと言っている (*Victims of Benevolence*, 1992 : 49, 注7)。
- (25) Furniss, *Victims of Benevolence*, 1995, Appendix, 125.
- (26) Ibid. : 31参照。
- (27) 怒りの感情から解放され、許し、愛せるようになったとき初めて癒しの道を歩めたということが、*Residential Schools : The Stolen Years* に収録されている多くの先住民作家の作品で語られている。癒しの具体的方法として、長老との対話、Healing Circle や Sweat Lodge (祈りを通して悩みや問題などを話し聞くことにより自己との和解の道へ至る助けとなる儀式) への参加などがある。Chris-john, *Impact of the Residential School*, 27参照。
- (28) Haig-Brown, *Resistance and Renewal*, 41, 94参照。
- (29) Furniss, *Victims of Benevolence*, 13参照。
- (30) The Apology to the First Nations of Canada by the Oblate Conference 参照。また、聖公会は謝罪文に加え、1993年に歴史的経緯、今後の対策に関する報告書を出している。
- (31) 鞭打ちなどの懲罰は、インディアン寄宿学校だけでなく、当時どの一般学校でも規制方法として普通に行なわれていたという弁解をする者もいるが、問題なのはその程度である。
- (32) Edward F. Wilson に関しては J. Donald Wilson の “No Blanket to be Worn in School,” 及び David A. Nock の *A Victorian Missionary and Canadian Indian Policy : Cultural Synthesis vs Cultural Replacement* を参照。
- (33) 特に、1991年に Bishop Hubert O'Connor が寄宿学校在職中に起きた数件の性的虐待に関して提訴されたことは大きくマスコミに取り上げられた。また、Cariboo Tribal Council の調査では St. Joseph Mission の学生の48%から70%が性的虐待を受けたと推定される (Cariboo Tribal Council, 1991, 23)。性的虐待に関しては、Vera Manuel, “Abyss”, *Residential Schools : The Stolen Years* 参照。
- (34) Furniss, *Victims of Benevolence*, 1992, 1-5 参照。
- (35) Maddie Harper の “Mush-hole” : *Memories of a Residential School*, Mary Lingman の *Sammy Goes to Residential School*, Shirley Sterling の *My Name is Seepeetza* など。
- (36) *Where the Spirit Lives* (CBC, 1989) や *Violation of Trust* (The Fifth Estate program, 1991) や *Beyond the Shadows* (Cariboo Tribal Council, 1992) など。最初のは日本でも放映された。後の二つは現在 Healing Circle などでも使用されている。
- (37) Kirkness, *First Nations and Schools*, 14-20参照。
- (38) Nock, *A Victorian Missionary and Canadian Indian Policy* 参照。
- (39) Barman, “The Challenge of Indian Education : An Overview” (1-21), 及び, Dianne Longboat, “First Nations Control of Education : The Path to our Survival as Nations” (22-42) , *Indian Education in Canada Vol.2 : The Challenge* 参照。

#### 参考文献

Anglican Church of Canada. A Brief Prepared by the Anglican Church of Canada for submission



- to the Royal Commission on Aboriginal Peoples at a Special Consultation between the Members of the Commission and Representatives of the Historic Mission Churches. Citadel Hotel, Ottawa, Nov. 8-9, 1993.
- Armstrong, Jeannette. *Slash*. Penticton : Theytus Books, 1985.
- Barman, Jean, Yvonne Hebert & Don McCaskill, eds. *Indian Education in Canada*. Vol.1 : *The Legacy*. Vancouver : University of British Columbia Press, 1986.
- Barman, Jean, Yvonne Hebert & Don McCaskill, eds. *Indian Education in Canada*. Vol.2 : *The Challenge*. Vancouver : University of British Columbia Press, 1987.
- Campbell, Maria. *Halfbreed*. Toronto : McClelland and Stewart Limited, 1973.
- Cariboo Tribal Council. *Lasting Effects of Abuse in a First Nations Community*. Williams Lake, B. C. : Cariboo Tribal Council, 1991.
- Chiefs Special Assembly on Residential Schools. March, 25-26, 1996. (report)
- Chrisjohn, Roland. *Impact of the Residential School*. Williams Lake : Cariboo Tribal Council, 1991.
- Furniss, Elizabeth. *Victims of Benevolence : Discipline and Death at the Williams Lake Indian Residential School, 1891-1920*. Williams Lake : Cariboo Tribal Council, 1992.
- Furniss, Elizabeth. *Victims of Benevolence : The Dark Legacy of the Williams Lake Residential School*. Vancouver : Arsenal Pulp Press, 1995.
- Haig-Brown, Celia. *Resistance and Renewal : Surviving the Indian Residential School*. Vancouver : Tillacum Library, 1988.
- Haig-Brown, Celia. "Not Vanishing" : Implications of Residential School Research for Today's Communities. (Paper prepared for presentation to American Anthropological Association, 94th Annual Meeting, Nov.19, 1995, Washington D.C.)
- Harper, Maddie. *"Mush-hole" : Memories of a Residentail School*. Toronto : Sister Vision Press, 1993.
- Jaine, Linda, ed. *Residential Schools : The Stolen Years*. Saskatoon : University of Extention Press, University of Saskatchewan, 1993.
- Johnston, Basil H. *Indian School Days*. Toronto : Key Porter Books Limited, 1988.
- Kirkness, Verna J., Sheena Selkirk Bowman. *First Nations and Schools : Triumphs and Struggles*. Toronto : Canadian Education Association, 1992.
- Knockwood, Isabelle. *Out of the Depths : The Experiences of Mi'kmau Children at the Indian Residential School at Shubenacadie, Nova Scotia*. Lockeport : Roseway Publishing, 1992.
- Lingman, Mary. *Sammy Goes to Residential School*. Toronto : Penumbra, 1991.
- Nock, David A. *A Victorian Missionary and Canadian Indian Policy : Cultural Synthesis vs Cultural Replacement*. Waterloo : Wilfred Laurier University Press, 1988.
- Oblate Conference of Canada. *An Apology to the First Nations of Canada*. 1991.
- Riley, Patricia, ed.. *Growing Up Native American*. New York : Avon Books, 1993.
- Special Consultation on Residential Schools, Royal Commission on Aboriginal Peoples at Canim Lake, B.C., March 8-9, 1993. (report)
- Sterling, Shirley. *My Nama Is Seepeetza*. Vancouver : Douglas & McIntyre, 1992.
- Tyman, James. *Inside Out : An Autobiography by a Native Canadian*. Saskatoon : Fifth House Publishers, 1989.
- United Church of Canada. *Apology to Native Congregations*. (date not listed)
- 煎本 孝 「カナダ・インディアンの文化変化」『カナダ研究年報』日本カナダ学会 第14号 1994年, 1-17頁

- 新保 満 「学校教育の功罪」『カナダの素顔』岩波書店, 1982年, 122—26頁
- 新保 満 『カナダ先住民デネーの世界：インディアン社会の変動』明石書店, 1993年
- 鈴木道子 「カナダ原住民とその教育」『カナダにおける多文化主義とその教育』カナダ教育研究会,  
1982年